

宿根草と一年草を組み合わせた新しい植栽方法 ～その意義と方法について～

林 角 郎

1. 花育活動と花壇植栽の問題事項

最近、子どもたちの健全な発育のために美しく咲く花の存在が必要という花育の目的で、小学校や幼稚園で花作りをする活動が全国的に行われています。これまでも述べたように、筆者はボランティアサークルの人たちとともに、平成18年から地元公民館の花壇の栽培を行っています。その管理の途中で、この市の建物内の子育て支援施設を利用する幼い子どもたちの多くが花壇の前を通る度に、きれいに咲く花のそばに立ち止まって見とれているようすをよく見ており、幼い子どもたちがいつでも身近に花を見ることができるよう環境の必要性を痛感しています。

他方、一般の家庭においても花作りの熱は高く、多くの園芸店で、ほぼ周年花のポット苗が豊富に並べられ、販売されています。しかしその内容を見ると、それらのポット苗の多くは一年草の花なので、その苗を植えて栽培しても、3ヵ月から5ヵ月程度で花は終わり、次の苗をまた購入して植える必要に迫られます。当然

その都度植え替えの手間も必要になり、そのわずらわしさから、つつい花作りがおろそかになる例も多いようです。

もう一つの問題としては、これまでの花壇材料による場合は比較的草丈の低い種類や品種が多く、結果として花壇は立体感の乏しい平面的な景観になりがちです。一般の家庭では樹木と組み合わせたり、容器栽培では容器の大きさを変えたり、階段を利用するなどして立体感を出せますが、公園や公共地等の大きい花壇では平面的植栽が景観上非常に不利になり、植栽した量に対し表現されるボリューム感がかなり減殺される恐れがあります。

このようにして、一つには花壇のいわば経済上の問題と、さらに景観的な効果の点から、これまでの花壇材料に加えて新しい材料の検討と開発、導入の必要性が痛感されます。

筆者が行ってきたボランティアの花壇栽培では事実上上限られた労力による栽培から、一年草を育苗しつつ



4月中旬宿根草の条間の一年草が花盛り



5月下旬一年草は抜き

毎回花壇に植込む形式の栽培がまず行き詰まり、このため前号に述べたように各方面のご協力によって順次宿根草に切り替え、これによって労力的にも、また種苗費等の経費的にもかなり安定した形にすることができました。そして結果的にその材料の特性上適度な草丈を保って咲く花が多くなり、2012年の今年の夏花壇では写真に示すようなかなり立体化された景観を得ることができました。

ただこの宿根草のみでは、春から秋までの景観は保持できる反面、冬の間には花が全くなってしまう、周年を通し切らず花で埋めるという本来の目的から外れることになります。このために冬から春にかけては、その期間内に極力長く開花を続ける一年草の材料を宿根草の株間や条間に植えつけることとし、この宿根草と一年草の組み合わせによる新しい花壇の植栽方法について目下検討を行っております。今回はその方法や意義と、当面選定しているそれぞれの種類、品種等について、これまで検討した結果を述べたいと思います。

2. この栽培における宿根草の選定基準

宿根草主体の花壇は、イギリスを中心としたヨーロッパ各国で多く行われ、わが国でも検討している種苗会社も存在し、また各地で実際に宿根草園としての植栽も見られています。しかし宿根草は概して開花期間が短く、多くは数日から長くても2～3ヵ月以内で花は終わります。もちろん開花期間は短くても開花時に印

象の強い種類もあり、それらを組み合わせて多種の株を少量あて植栽して常にどこかで何かが咲くように配置することがこれまでの宿根草花壇の基本でした。しかし、そうは言ってもすべての時季を完全に埋めることは難しく、とくに大面積の区域を多種の組み合わせで常時花で埋めるのは不可能と考えられます。このため筆者としては種類に限られても開花期間が年間4ヵ月以上、できれば6ヵ月程度続く種類を第一の目標として選ぶことにしています。この場合継続開花といっても次々と枝が出てその枝に順次咲く連続型と、フラッシュがあって一度満開になって花が終わった後、下部から新しい芽が出てその枝が伸びてまた花が咲くという断続型の種類もあります。この断続型は一時開花は途絶えますが再度花は見られ、それが年2～3回繰り返されるといことから継続開花として選ぶ中に入れています。

また開花時の草姿も分枝が多数出て地表を覆うように広がるタイプと別に、株立ち型に枝が上に伸び先端に花をつけるタイプがあり、この方が開花期も断続型になりがちです。さらに枝が木化するものはブッシュタイプとなり開花しながら樹冠が大きくなります。この場合は冬も枝が残るため、条間に植える一年草の種類を選ぶ必要がありますが、その点は後述します。

次に草丈の点も宿根草では種類によりかなり異なるため、前述のような立体的景観を高めるために20cmから70cm程度のものを基本として選んでおり、さらに高性の種類では生育初期に1～2回摘心して高さを調節



取られ宿根草が伸び出す



8月中旬宿根草の開花は続き、秋までこの状態が続く



花色、花型の豊富なエキナセアの各品種



性質も強く開花期間も長いガウラ
品種はフェアリーズソング



広く咲き広がるアキレア・プタルミカ
‘ペリーズホワイト’

するよう考慮して利用の可否を検討しています。

さらに種類の検討のためには耐候性も重要で、とくに夏の高温と乾燥について考慮する必要があります。夏の暑さは年々厳しくなるように思われ、さらに安房地域では夏の雨量が極端に少なくなる傾向にあるためそれらに十分耐える性質が望まれます。この点宿根草は一年草より根が深く張って抵抗性は高いように思われ、その点にも宿根草を取り入れる意義はありますが、さらに宿根草にの中での違いについても考慮し、実際に栽培してその抵抗性を確かめております。

3. 当面考えられる宿根草の種類と特性

このような選定条件のもとで、現在もなお種類や品種の検討を行っていますが、これまでの栽培結果等から好ましいと思われるものを一つの例として一覧表に上げましたのでご検討いただきたいと思います。

前項で述べたように長く開花を続けるということに重点をおいて選んでいます、このため花色にかたよりがあって、白と青の花の種類が多い状況となっています。また最近ではペチュニアの中で宿根性となる品種も出ていますが、栽培した結果ではまだ安定して株が残り毎年花を咲かせる確信が得られないので入れてありません。

4. 冬作に利用する一年草の種類と栽培

以上述べた宿根草は安房地域の場合 12 月中下旬に降雪があると地上部が枯れ始めるため、その頃に原則として地表近くで刈り込んで根株のみとし、条間や株間に 4～5 月まで開花する一年草を植えます。このような条件はわが国の場合積雪地域や東北、長野県等の寒冷地を除けば全国的にかなり広い地域に適合するものと思われます。

一年草と組み合わせた周年型花壇用宿根草の種類と特性概要

種類	おもな品種	開花期 (月)	花色	草丈 (cm)	繁殖		開花 状況	草型
					種	株		
ガウラ・リンドハイメリ	フェアリーズソング、 ペインズフェアリー、 イノセントフェアリー	5～12	薄紅、白、紅	80～100	○	○	連続	株立ち密生
ネベタ×ファーセニー (ブルーキャットミント)	ワーカズロー	5～9	青	50～60	—	○	連続	密生タイプ
エキナセア・ブルブレア	各品種	6～11	紅、黄、橙、白	60～70	○	○	断続	株立ちタイプ
エリゲロン・カルヴィンスキア ヌス	源平小菊	4～10	白から紅	20～30	—	○	連続	密生ひろがり
アキレア・プタルミカ	ペリーズホワイト他	6～10	白	20～30	—	○	連続	密生ひろがり
ルドベキア	各品種	7～10	黄	70～80	○	○	連続	株立ちタイプ
ヒビスカス	ディスコベル他	7～9	白、桃、紅	60～80	○	○	断続	ブッシュタイプ
ブルンバゴ・アウリクラタ	エスカベートブルー エスカベートホワイト	6～11	青、白	40～60	○	挿	連続	ブッシュタイプ
ランタナ・カマラ	ハイブリッド	6～11	桃、黄、白	50～70	○	挿	連続	ブッシュタイプ
サルビア属 (セージ)	アメジストセージ ラベンダーセージ	6～11	青紫	60～80	—	挿	連続	株立ちタイプ (要摘心)
カラミンサ・ネベタ		7～10	白	50～60	—	○	連続	

注：繁殖 種は種子により、株は株分けにより、挿は挿し芽により繁殖する。開花状況、草型は筆者の観察による（本文参照）

この冬季間に栽培する種類としては通常の秋まき一年草が該当しますが、問題は開花の期間で、年末に植えて直にか、間もなく開花して、少なくとも4月いっぱいまでは開花の続くことが望まれます。そして株もよく茂って、これまでに植わっている宿根草の上まで覆い尽くすことが望まれます。この条件にはバイオラや小輪パンジーの最近の品種が最も適合し、花色を組み合わせで長期間よい景観を保つことができます。

しかし、一つの問題は草丈の低いことで、これだけでは平面的な状態となるため、より草丈の高いもので開花期間の長い種類も考えておく必要があります。この点当地での経験から述べますと、アイスランドポピーのカクテル系がまず上げられます。またストックではKKクロカワで最近発表したベイベー系の各色品種も好ましいと思われます。ストックのこれまで利用されている花壇用品種は開花期間が短く、年末から咲いた株は3月ごろまでに咲き終わってしまいましたが、ベイベー系は茎が強直でわき芽の発生が多いため一度中心花が咲いた後、下から出る芽も順次開花し、5月初めまでは十分開花を続け、枝もよく茂ります。以上の2種は草丈が30～50cmになるため、前述したブッシュ状になって冬越しするブルンバゴやランタナの条間に植えるのも適しています。

5. 容器栽培への利用

この宿根草と一年草の組み合わせ栽培は、これまで花壇の床植え栽培で検討してきましたが、植えつけ方法を工夫すれば容器栽培も十分可能と思われます。その場合大型容器なら比較的良好に茂る宿根草を適当に株間を開けて植えつけし、年末に地上部を刈り込んで、その株間に一年草を植えるようにします。またよく使われるプラスチック製のプランターでは宿根草を1箱に2株あて植えてそのまま生育させ、冬には地上部を刈り込み、株間と両端に一年草を植えます。もちろん冬には何も植えず別なところで冬越しさせてもよいでしょうが、一般家庭では場所の余裕のない場合が多いので、1つの容器で植えたまま周年利用を考えたほうがよいと思われます。

6. 栽培のための種苗の入手と苗の育成方法

一般の園芸店では前述のように一年草が主体で宿根草の種類はまだ限定されています。また、種苗会社の

通販では多種扱われる反面やや高価です。この点、今後苗生産もより多くの種類を扱うようになってほしいと思いますが、当面は希望者が自身で調達するのやむを得ないでしょう。この宿根草の繁殖方法として株分けや挿し芽等の方法があって、種類によっては元株を購入後、短期間に繁殖できるものもあります。しかし期間と手間を考えた場合、種子を購入して一度に必要量を育苗するのが一番たやすいと考えます。この種子の入手ですが、最近は国内の種苗会社でも各種の宿根草の種子を扱うようになっています。ただ取り扱う量は1000粒以上の場合が多く、家庭栽培には不向きですが、最近の情報では国内の業者の取り次ぎでドイツの専門の会社から購入できようで、この場合は50～100粒の小単位の量から扱い、しかも種類の数がかなり多いようです。しかし種子の販売のない種類や栄養系の品種で種苗登録のない品種は元株を購入し、挿し芽等で繁殖するほかありません。

ただ、種子からの導入では育苗のわずらわしさがありますが、当地のボランティアサークルでは普通のセルトレイにスーパーミックス等の播種用土を入れて播き、発芽後ビニルポットに移植するだけで簡単に育苗しています。したがって家庭の人々が宿根草を種子から取り入れることもさほど困難ではないでしょうが、さらに容易に各種の苗が購入できる、いわば「宿根草時代」の到来をひそかに願っております。

7. 今後の取り組みの方向

以上のようなことで、筆者としては当地のグループとともに宿根草と一年草の組み合わせ花壇を今後も続けて、新しい品目の開発を進める予定です。とくに筆者としては大型花壇の実例をつくるため、これまで紹介しているJR館山駅東口花壇に宿根草を導入すべく、花業会会員の落合哲平さんにもご協力いただき、館山市側に働きかけて実現したいと考えています。

また、現在のところ、筆者自身は花壇栽培のみに的を絞って考えていますが、この動きが拡大すれば鉢物生産への宿根草の利用も当然考えられますから、花壇栽培とともにその進展について、花業会会員の皆様のご検討を切望いたします。